

映画『ノクターナル・アニマルズ』公開記念インタビュー／作家 有栖川有栖さん

20年前に別れた夫から届いた小説は、愛なのか、復讐なのか——。 人間の愛憎をスリリングに描いた、大人のミステリー

ある日突然、20年前に別れた夫から送られてきた小説。それが意味するものは愛なのか、それとも復讐なのか——。ファッション界で確固たる地位を築いたトム・フォード。映画『ノクターナル・アニマルズ』は、デビュー作『シングルマン』が高い評価を得た彼の7年ぶりの監督作だ。豪華なキャストと映像の細部にまで宿る美学に魅了される本作の魅力は、有栖川有栖さんがミステリー作家ならではの視点で語った。

——ヒリヒリする怖さから片時も目が離せない

ショッキングな冒頭からラストまでスリリングで不穏。息をつめて観入り、片時も目が離せませんでした。観終えた後までヒリヒリする怖さが残るほどでした。

彼女の所へ、20年前に別れた元夫のエドワードから、犯罪を題材にした自作の小説『夜の獣たち（ノクターナル・アニマルズ）』が届きます。そこから現在と過去という二つのリアルと、小説という一つのフィクションが絡み合い、物語は進んでいきます。

映画を観る前に原作を読んだのですが、これを映画にするのは難しいのではないかと思います。何しろ主人公スーザンは、基本的にはソファに座ったりベッドに寝そべったりして小説を読んでいるだけ。要は読み手と同じことをしているわけです。非常にユニークなスタイルですが、それが成立するのは小説だからこそ。映画でその表現をして人を魅了するのは到底無理だと思っただけです。

ところが、本作は逆に映画にできない手法で観客を引きつけます。劇中小説の主人公トニーと現実を生きるエドワードを同じ俳優ジェイク・ギレンホールが演じ、それによってフィクションと現実



の壁が薄くなり、スーザンが読書に没入すればするほど同調して、彼女のエドワードへの思いを納得してしまおうという効果です。まさに小説ならではの手法を駆使した小説を、映画ならではの技法で映画化したところが見事です。

また、原作でのスーザンは専業主婦で医師の妻だったのですが、映画では現代アートを扱うギャラリーのオーナーに設定が変わっています。それによって断然、華やかになり、フォード監督が得意とするデザインセンスもふんだんに生かされ、映像としての美しさや楽しさが増えています。何よりスーザンを取り巻く現代アートはどこか難解でミステリアス。謎めいたものに囲まれて生きている主人公が、元夫に謎を投げかけられて——というストーリー展開が実にいい。誰もが思わず引き込まれる要素になっています。

——愛憎の描き方も秀逸。誰もが我が身を振り返る

そもそもなぜ元夫のエドワードは自作の、暴力的で残酷な小説をスーザンへ送ったのか？ 私自身は復讐だと思いましたが、いや、これこそが彼の愛の表現だと言っている人もいます。いずれにしてもこうした愛憎の描き方も秀逸な映画ですね。スーザンとエドワードの関係にしても、劇中小説の残酷な出来事にしても、「自分とは関係ない話」と観客に決して思わせないところが素晴らしい。また、愛憎



——文学という表層に包まれた謎が残る極上のミステリー

本来、「犯人は誰か」という当事者しか知りえない答えを突き止めるのがミステリー。そういう意味で劇中小説はオーストリアなミステリーです。一方、この映画の外側、現実部分は純然たる文学作品です。人の「心の謎」に迫るのが文学なのですが、まさに本作の現実部分は人の心を描いています。もちろん、人の心の謎は解けません。だから本作は「謎が残るミステリー」という非常に珍しい作品に仕上がっています。でも、それが本作の一番の面白さであり、魅力になっているのです。

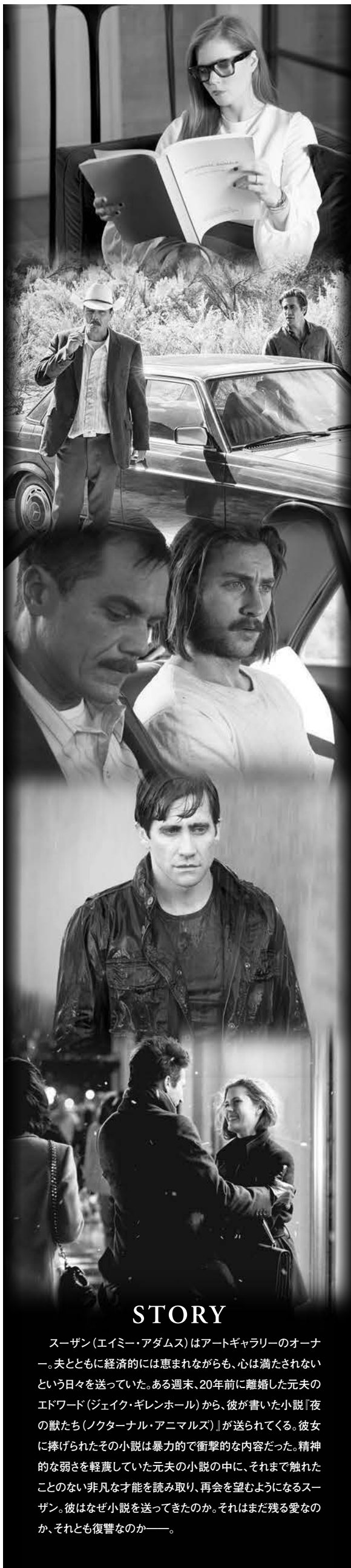
映像も、一つの芸術作品と言ってもおかしくないほど美しくスタイリッシュ。随所に暗喩的なものが散りばめられていて細部に至るまで計算し尽くされています。文学やミステリー、アートが好きの方すべてにお薦めしたい映画です。

(談)

外側に文学をまとった上質なミステリー。 これは小説では描けない極上の物語

作家
有栖川 有栖さん

ありすがわ・ありす／1959年大阪府生まれ。同志社大学法学部卒業。89年「月光ゲーム」で作家デビュー。書店勤務のかたわら創作活動を行い、94年から作家に専業。2008年「女王国の城」で第8回本格ミステリ大賞受賞。推理作家・有栖川有栖と犯罪学者・火村英生のコンビが活躍する「火村英生シリーズ」は25年の人気を誇るロングシリーズとなっている。ほかの作品も多数。近著に「狩人の悪夢」など。



STORY

スーザン（エイミー・アダマス）はアートギャラリーのオーナー。夫とともに経済的には恵まれながらも、心は満たされないという日々を送っていた。ある週末、20年前に離婚した元夫のエドワード（ジェイク・ギレンホール）から、彼が書いた小説『夜の獣たち（ノクターナル・アニマルズ）』が送られてくる。彼女に捧げられたその小説は暴力的で衝撃的な内容だった。精神的な弱さを軽蔑していた元夫の小説の中に、それまで触れたことのない非凡な才能を読み取り、再会を望むようになるスーザン。彼はなぜ小説を送ってきたのか。それはまだ残る愛なのか、それとも復讐なのか——。